

[インタビュー]

家族，地域社会の機能再生を

山谷 えり子¹⁾ [聞き手] 岩室 紳也²⁾



岩室 私は公衆衛生医として学校現場で子どもに向けて性の話をし、また泌尿器科医として臨床現場で性感染症やエイズの方の診療もしていますが、日本の若者が直面する性の問題を克服するには、子ども一人ひとりを、性教育と、家庭や地域社会の力という2つの側面から支えていく必要があると考えています。山谷先生が繰り返し指摘なさっておられるように、現在コンセンサスが得られていない性教育があることも事実ですし、先生が政策理念に掲げられているように、家庭や地域社会の機能を再生することが、性の諸問題の解決に不可欠だと思います。

しかし、ではどうすればよりよい方向に向かえるのかとなると、具体的な方法論がなかなか見えてきません。今日はそのあたりについて、先生のお考えを伺えましたらと思います。

山谷 まず、家族と結婚というものが、いかに神聖で美しく尊いものかということ、親が子どもに語ることが大事だと思っています。ただ、今はそういう親も減っていますね。祖父母がそれを補強する形で、孫に対して、男と女がご縁をいただいて結ばれ、一つの命を授かり、それを育ていくことがいかに尊いことかと、伝え語っていかなくてははいけない。

岩室 理想だとは思いますが、そもそも語る大人がほとんどいませんよね。

山谷 おっしゃるとおり、この頃は多様な家族が

増え、様々な形で愛情をかけてあげられることを支援する仕組みが必要になってきていると思います。私は公立小学校のPTA会長や、教育委員を経験して、全世田谷区の小学校64校に、「どの子どもでも夕方6時まで、6年生まで遊んでいいよ」という仕組みをつくりました。地域のボランティアの人たちをお願いをして、「私たちはビックファミリーよ、地域みんながかかわろうね」という形で、愛がいかに素晴らしいものか、子どもたちに体で実感させてあげたいと思ったのです。

岩室 私はマザー・テレサの「愛の反対は無関心」という言葉が好きなのですが、子どもたちにかかわる大人を増やす取り組みはすばらしいですね。

山谷 そこでは、昔校長先生だったおじいちゃんや、婦人会の人が子どもたちに宿題を教えてくれたり、地域の大学生がスポーツを教えてくれたり。またお父さんたちにも、例えば写真を写すのが大好き、焼き鳥を焼けるなど、得意技を登録してもらって、いろいろな形の「おやじの会」を仕掛けていきました。豚の丸焼き大会、校庭にテントをはって近くの銭湯にみんなで入りに行く会、そして地震が起きた時でも一人で歩いて帰れるようにと、地域のお父さんたちが励ましてくれる中で、子どもたちが家まで1人で歩いてみるという企画もありました。そんな中で、お父さんの喜びと切なさ、かつこ良さと不器用さ、また地域の人

1) やまたに えりこ：参議院議員 連絡先：☎100-8962 東京都千代田区永田町2-1-1 参議院議員会館611号室

2) いわむろ しんや：(社)地域医療振興協会ヘルスプロモーション研究センター



山谷えり子氏：参議院議員。自由民主党所属。1973年聖心女子大学文学部卒。出版社勤務を経て、ラジオ・雑誌・新聞の特派記者として渡米。その後サンケイリビング新聞記者、産経新聞生活面記者、テレビキャスター、エッセイスト。1988年にサンケイリビング新聞編集長。2000年衆議院議員、2004年参議院議員当選。

たちの温かさなどが見えてくる仕掛けを、意識的に作っていったのです。

人間という字は「人之間」と書きますが、様々な関係性の中で、人間性が育まれていきます。家族がしっかりとあることが一番望ましいのですが、そうではない場合も多くなった今、気づいた人が地域にそのような仕掛けを作っていくことが大切ではないかと思います。

岩室 現代社会の人と人との関係性の喪失は、公衆衛生分野でも重要な課題になっています。大人が子どもたちにかかわっていけば、自然な形で性についても学ぶ機会が増え、学校での性教育もいらなくなるのでしょうかね。

日本は昔から性に無神経？

山谷 このようなことを言うと誤解される可能性もあるのですが、今、学校現場で、乱暴なジェンダーフリー教育がなされている現状があります。私は今年4月より自民党で立ち上げた「過激な性教育とジェンダーフリー教育実態調査プロジェクトチーム」の事務局長をやっています。全国から3,500程の声が、子ども自身から、また保護者から寄せられました。例えば体育の授業で男女

でおんぶし合ったり、おなかをつけあったりする、男女ペアで体をほぐす運動や、また林間学校で男女一緒に同じ部屋やテントに寝かせたり、中には男女同じトイレを使っている学校もあって、そういうことに対して、特に女の子が「いやだ」と言っています。健康な男の子と女の子って、小学校1,2年ぐらいいまでは無邪気に一緒に遊んでいるかもしれないですが、その後はお互い本能的に、距離を置きたいという感覚が出てくるものだと思います。女は女で、言葉遣いや仕種などに女の子特有のとても美しいものを持っていて、男は男で、非常に美しい魅力があり、しかし今、それぞれが持っている持ち味や魅力に気づかせないような形で、ザッと教育がなされてしまっている気がします。それは男女差別とは何の関係もありません。私は男女差別や女性差別はあってはいけないと思うし、女性の社会進出や自己実現は、叶えられるべきものだと思います。

岩室 私は小学校の6年間、ケニアでイギリス系の教育を受け、今から37年前、小学校6年生の終わりに日本に帰ってきた時、ショックを受けました。第2次性徴も始まっている小学6年生にもなって、男女が同じ部屋で体操の着替えをさせられていたのです。その頃から日本はおかしかったと思います。

是正すべきところはきちんと直そう

山谷 性教育に対して、本当に様々な意見があがってきました。小学3年生の子どもを持つお父さんからの声です。

“ある静かな夜のこと、お母さんが『私、赤ちゃんがほしいな』と言うと、お父さんは『そうだね、かわいい赤ちゃんがほしいね』と答えました。お父さんとお母さんがしっかりと抱き合い、ペニスをお母さんのヴァギナに入れて精子を送ります”，と書いてあり、裸になる。そのような描写がかわいい写真と共に載っている教材を学校の性教育で使っていて、けしからん、と。

本当にひどい例が多数集まっています。

これは中学2年生の教材です。読み上げますと

「セックスは一人だけとするものと思っている人もいます。また、違ったたくさんの人とでも構わないと思っている人もいます、セックスについてはどれが良いか悪いかはありません。ちょっとどぎつい言葉だけど、やりたいか、やりたくないか、自分の心をよくのぞいてごらん、YESかNOか。ハードルをこえなくては大人の世界に入る資格はないよ」とあります。このような教育をされると、子どもたちに「コンドームさえはめれば、ピルさえ飲めば、フリーセックスOK」という、間違ったメッセージを送ることになります。しかもこれは完全に学習指導要領違反なのです。

岩室 子どもたちが「コンドームさえはめれば、ピルさえ飲めば、フリーセックスOK」と思うかはともかく(笑)、性教育の中でも、コンセンサスが得られないような、このような極端なものがあることは事実ですね。

山谷 「オチンチンの話」という紙芝居で、オチンチンという部分を「ペニス」と読みかえなさいと、文部科学省指導に違反する指導資料を、県のあるいは市の教育委員会が作っているのです。それが複数なのです。ですから、「これが一部である」という言い方はもうできないというのが、文部科学省の認識です。

岩室 山谷先生のご指摘で、急速に学習指導要領に沿った指導へと、性教育の是正が進んでいるのではないのでしょうか。日本の親には教育の選択権がないからこそ、きちっと一定のルールを決めなければならないことは論を俟たないと思います。ただ、現実にも目を向けると、中学3年生の1割、高校3年生の4割は性体験を持っていますよね。

若者の現状にどう対処するか

山谷 厚生労働省の研究班の調査では、19歳の女の子の13人に1人が性感染症にかかっている。欧米の5~10倍、世界最悪の性病大国になってしまった。しかも女の子が貧しくもないのに、遊びと贅沢のために自分の体を売るという、おそらく世界のどこにも例がない、非常に悲しい国になっていますね。

岩室 セックスがコミュニケーションの一つになってしまった若者たちに、どのようなメッセージが効果的なのでしょう。

山谷 私は高校まではと言いますか、「結婚まではノーセックスが望ましい」と伝えたらいいと思います。中教審でも高校までは全体的にはノーセックスが望ましいという方向です。個別的に、必要な子たちには丁寧に、洞察力を持って、場合によってはコンドームの技術指導も必要かもしれませんが、親ときちんと話し合う形で行うのが理想的かと思います。10年前から日教組が現状の性教育を行ってきた結果、世界最悪の性病国になってしまったわけですから、それは謙虚に見直して、子どもたちを守るために軌道修正すべきところはしていくという気運が出てきたことは、いいことではないかと思っています。

実は初めて子どもたちに「ノーセックス」を実施したのがウガンダのムセベニ大統領です。エイズ感染率が21%に達し、それを抑えるために「結婚まではノーセックス」を提唱しモラルを訴えました。その結果、感染率は10年間で6%にまで減少しました。また、15~24歳の男性の婚前性交率が、1989年60%だったのが1995年には23%、女性は53%から16%に減少する効果を上げました。

米国でもエイズ感染の心配がなく、体も心も健康でいられる「結婚までノーセックス」のメッセージを送ったら、カリフォルニアのサンマルコ中学で、年間147人いた妊娠者が1年で20人に減ったそうです。ブッシュは特にモラルの強い支援団体を得ていますので、アメリカでは補助金を140億ドルまでどんどん上げて進めていますし、イギリスでも親の教育権を認めなければ性教育はできないという形になっています。遅れた日本の性教育はこれ以上やめて、人間性をよく見て、欧米の失敗例に学びながら、新しい明日の日本の性教育というものを考えていかなければならない。

岩室 純潔教育の成果についてはいろいろな評価があると思いますが、どうやって子どもたちにノーセックスを納得させ実行させるかというところ

で、非常に悩むところです。現場ではスローガンを言えば言うほど、子どもたちがひいていく。

山谷 生命尊重教育で言えば、宗教家、日本で言えば神道、仏教、キリスト教の方が、もっと性教育の現場に出て行ってほしいと思うのです。命とは何か、生命哲学とは何かを、きちんと子どもたちに話していただきたい。

岩室 なるほど、明日からでも始めていただきたいですね。

コミュニケーションが苦手な日本人

山谷 子どもたちが、人間がいかに生きるのが美しいか、香り高い生き方とは何だろうかということ、体験したり考えたりする場所を作らなければいけないと思います。私がアメリカにいました時に、心理的なスクールカウンセラーの他に、キャリアカウンセラーが20万人弱学校にも配置されていました。例えば学生が「アナウンサーになりたい」と言えば、キャリアカウンセラーは「OK、じゃあ私、あそこの図書館に紹介状書いてあげるから、今度読み聞かせのボランティアをしてもらっちゃい」とアドバイスをくれる。学生は図書館で自分の得意技の読み聞かせをしていくうちに、人格的にも豊かになってきて、自分への信頼感も高まって、またいろいろなタイプの大人たちと知り合うことによって、人生の尊さがわかるという体験学習ができる。そのような場を、日本でもシステムチックに増やしていくことが大事だと感じました。アメリカはインターンシップ、キャリアなど様々な体験を企業が受け入れたという場合は、税制の優遇などの補助がいろいろあります。私は議員立法で、自民党にキャリアと体験学習の推進支援法を出しているのですが、なかなか進展しないのが現状です。

岩室 地域で若者たちを支える環境の整備は急務ですね。しかし今、人とうまくつながれない人が多く、性教育批判の矢面に立たされている人々も、コミュニケーションが下手だから、「ここはやっぱりやりすぎでしたよね」と誰も言わない。全部を否定された気持ちになって、喧嘩に終始し

ています。これは今の日本社会の問題点を表していると思うのですが。

山谷 どうしてでしょうね。私も決して非難しているわけではなくて、「どの辺がいいか話し合ひましょう」と言っているのですが…。

根拠に基づく評価を

岩室 子どもたちも批判に弱く、「セックスしないほうがいいよ」とだけ言うと、性体験がある子どもたちは自分が否定された気持ちになってしまいます。しかし彼らは、若者たちの目線で話をすると真剣に聞いてくれます。例えばコンドームについて正確な使い方を教えると、「えっ、そんなに難しいの?」と、彼らの中で驚きが生まれます。「ここまで正確にできた人は今まで1人しか出会っていない。でも、その人はたった1回だけコンドームが破れて、それでHIVに感染したよ」と。「君たちはそんないい加減な知識でセックスをするの?」と。そこまで伝えると、「やっぱりセックスをするの、やめておこうって思った」という声が多く出てくる。自分や患者さんたちの経験、生き方を語ることは効果的で、私はそのように子どもたちの心に入って行って考えさせようとしているのですが、その辺りについてはどう思われますか?

山谷 それはやはり教える側の人間性なのでしょうね。岩室さんのように人間味あふれる、子どもの悲しみや寂しさをよくご存知の方は、おそらく子どもの心に寄り添うことができるのだらうと思います。しかし今、なかなかそれだけの感受性と悲しみの体験を自分に引き受けられるだけの、情操豊かな大人がいないものですから、いい感じのマッチングした必要な性教育が、子どもたちの心に届かないのでしょう。

イギリスのサッチャー首相が1979年に政権に就いた時に、子どもたちの基礎学力をもっとあげるべきだと、モラル、宗教的な情操が大事で、子どもたちには浮気の権利があることなど教えないでほしいと主張していました。当時はイギリスの労働組合、教職員組合が強くて、自己決定、個人

の権利の拡大というのは善であるという思想で、浮気の権利まで教えていたわけです。今の日本はその頃のイギリスの状況と似てきていますね。サッチャーは全国の学力調査をし、学校名と点数をすべて発表し、悪い点数の子どもの親には、いい点数の学校に変わりたければ転校させなさいと言ひ、悪い学校にはいい先生や様々なタイプの先生を送り、予算をつけ、結果、1,200の学校が立ち直るのです。でも立ち直れなかった190を廃校に、適さない先生を養成している教員養成大学6つを廃部にしてしまった。

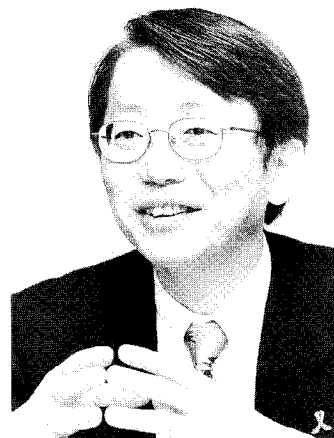
日本でも全国学力調査をやしましょう、Evidence-basedで対策を立てていくべきだということをして中山文部科学大臣に申し上げました。現在小学1学年、中学1学年で全国学力調査が始まっています。

性教育も、アメリカがやったように、「この教育をしてみたら妊娠中絶が〇%減った」とか、「コンドーム技術指導の授業をしたけど結局5分の1の子は教えたにもかかわらずはめられなかった。また5分の1の子は失敗した」など、Evidence-basedで、トータルに考えていきたいですね。そしてEvidence-basedで適した教育を判断し、予算を付け替えるという政策を、日本もとっていくべきだと思うのです。

岩室 親が望めばですが、ぜひEvidence-basedに、岩室の性教育の評価をしていただきたいですね(笑)。

情操教育を徹底したい

山谷 知徳体と昔から言いますが、知性や基礎学力、徳を高める徳目を教えていく、もっと徹底的に朗読や暗唱などの情操教育を行うべきだと思っています。情操心を養う教育と体育で、子どもの心と身体を鍛える。今、とにかく子どもたちが鍛錬を体験する場が奪われている。子どもというのは、基礎学力を向上し鍛錬していく中で、自分に対する信頼感が高まっていく。そして成功と失敗の体験を経ることによって、友達の素晴らしさ、友達の悲しみも見えてくるものなのですが、



岩室 紳也氏

日本の教育は最近競争をさせない。したがって自分の弱さも強さもわからない。ちょっと攻撃があると必要以上に落胆し、引きこもってしまう。そのままの自分でいいのだと、大らかに笑えるだけの成功体験と失敗体験が必要だと思うのですよ。

岩室 同感です。

山谷 情操教育に関して言えば、過日、知人の大学教授より、数十人の女子大生のうち子守歌を聞きながら眠った経験があるのは3人だけだったという話を聞いてショックを受け、森喜朗前総理を会長に、私が幹事長となって、「日本の歌とお話伝承普及議員連盟」をつくりました。例えば子守歌を歌いながら、赤ちゃんの笑顔を見ていくうちに、人には母性が育っていく。長い歴史により、女たち・母たちの悲しみと喜びの魂が、子守歌の中に込められているのですから。子守歌、童謡、唱歌、郷土の偉人伝などの普及に対して、政治の立場からも応援していきたいと考えています。

岩室 この話も素晴らしいなと思いますが、多くの子は、自分も子守歌を聞いた経験がないから、自分の子どもに子守歌をどう歌ってあげたらいいかわからない。何か切り捨てられている子どもたちが見えてくるように思うのですが。

山谷 まずベーシックなところを豊かにしていき、そこにもアクセスできない子どもたち、それはいつの時代でもいますし、本当にその子たちが

素晴らしい人生を送れるようにと、いつも目を離さず祈り続けていく大人たちの存在を増やしていく、社会全体としてマインドを高めていくことが大事だと思います。

総合的な取り組みを

岩室 性情報が氾濫している社会についてはどうお考えですか？

山谷 IT自体に罪はないわけですが、小学生からアダルトサイトが見れたり、影の部分が深くなってきてしまっている。私は何年も前から、文部科学省は、すべての学校に配置しているパソコン、インターネットにフィルタリングすべきだと、また家電製品の売り場でも、家に子どもがいる場合フィルタリングについて説明することを努力義務にすべきだと国会で言っているのですが、まだこれすら実現できていないのです。

岩室 山谷先生にお話いただいた方向でトータルに動けば、子どもたちにとってすばらしい環境ができると思いますが、現実には一部の過激な性教育のために他の性教育も否定されている一方で、氾濫する情報には手をつけられないまま、崩壊した家族と地域の中で子どもたちが今も育てられている。大半の人が結婚前にセックスをし、できちゃった結婚が当たり前の時代で、離婚もまた当たり前になっています。この現実の中で、性教育において主人公であるはずの若者不在のまま、エビデンスが積み上げられることもなく、批判合戦だけで終わってしまっていることが非常に悲しいのですが…。

山谷 岩室さんのように長い間ご努力をされてきた方にとっては、なおさらもどかしいし、対立しなくてもいいところで対立して、それ以上議論が進まなくて、生産的な方向に行かないことが非常

に悲しいというお気持ち、私も本当に共感するところですよ。ただその年齢、今の社会にとってふさわしい性教育とはどういう形があるのかという部分に関しては、もっといろいろな分野の方たちがいろいろな風景を見ていらっしゃるわけですから、率直に話し合って、一緒に子どもたちを守っていくことをやらなければならないと思うのです。

でも今回、性教育の議論に関しては、一つの大きな問題提起にはなったのではと思います。テレビ番組の中で私と小泉総理のやりとりを冒頭で流し、細木数子さんが「セックスというのはあなたたちが考えている以上に、魂の奥深いところのこと」とおっしゃったようですが、性に関して様々な方がメッセージを発していくことが大事でしょうし、現場でもどかしい思いをしていらっしゃる岩室さんのような方の思いを实らせていくためにも、具体的には厚生労働省と文部科学省と内閣府、教師や医師だけではなく、宗教家、普通のお母さん、あるいは傷ついた子どもたちなど、いろいろなメンバーで共に考え、作る作業をしていかなければならないと思っています。

岩室 そうですね。ぜひ山谷先生のほうでエビデンスを積み重ねる方向にリードしていただき、不毛の喧嘩に終わっている今の性教育バッシングを突りある方向に、大いに引っ張っていただければと思っています。

山谷 そうしたリーダーシップというのが必要な局面にあると思います。エビデンスを積み重ねていきたいですね。微力ながら頑張っていきたいと思います。今日はありがとうございました。

岩室 統計に強い人材が、「公衆衛生」誌の読者にはたくさんいますので、そのときはぜひお声掛けください(笑)。

今日は本当にありがとうございました。(了)